馬門橋（下益城郡砥用町）

苔石よ、心やさしき石工の誇りを語れ

橋は、黙して語らない。けれど、石橋を造る一つ一つの石は雄弁だ。

緑川流域を中心に、県内だけで約二百七十も残る眼鏡橋。その多くを架けたのは、種山村（現・八代郡東陽村）出身の石工集団であった。石工たちの総力を集めて造られた霊台橋や通潤橋は、特に有名。一方で多くの橋は、たんぼを潤す水路橋として、子どもたちの通学路として、たんぼの中や用水路の脇に、ひっそりと生き続ける…。

そんな橋たち、特に初期のものは、アーチリングの上に積まれた石が不規則に並ぶ。石橋は当時のハイテクノロジー。架けるには、莫大な費用が必要だ。お金はないが、流されない橋は架けたい。村人たちの悲願に、種山石工たちは、お金の代わりに人夫や材料の石を出してもらい、ギリギリの予算でも工事を引き受けたという。大きさや形がバラバラの石積みを〝乱れ積み〟と呼ぶ。大きさを切り揃えた石で造るよりも、大小いろいろな石で強い橋を造るのは、はるかに高度な技術が求められる。その技術が、種山の石工にはあった。石橋が完成したときの人々の喜びが、彼らにとって何より大きな報酬だ。

小さな橋は幅一・五メートルほど。長さ三メートルしかない橋もある。それぞれが、それぞれの地域の人、荷物、そして喜びや幸せを渡してきた。御船町在住の郷土史家・奥田盛人さんは言う。「石橋は〝虹〟です。だからこんなに、私たちをひきつける」。流れず、腐らず、一世紀以上も美しいアーチを描く石橋。完成するまでは、憧れの虹、完成してからは、人々の生活を守る、希望の虹だ。乱れ積みの風景は、貪らず、奢らず、こつこつと橋を造った人々のこころねを、今に伝える。